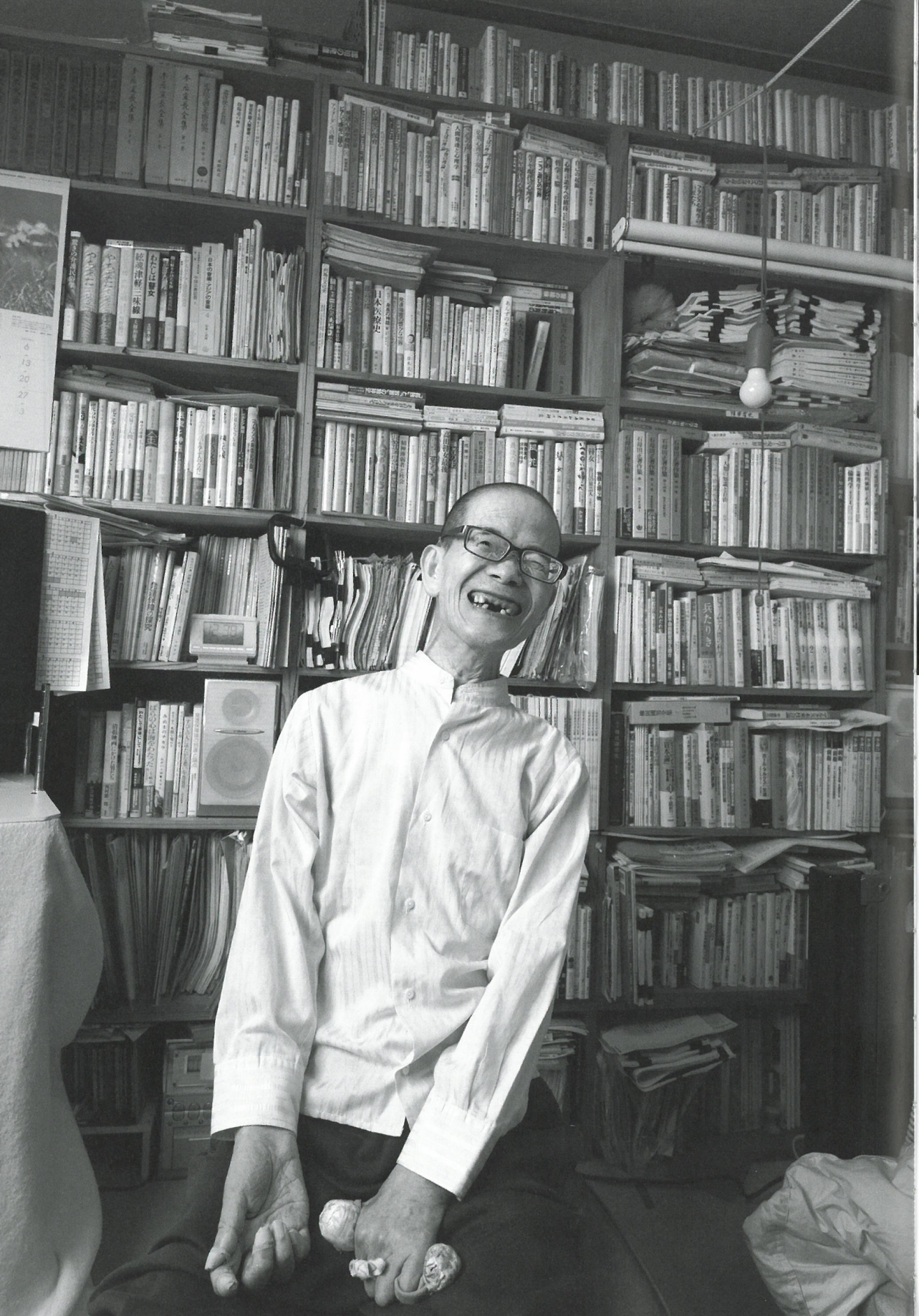
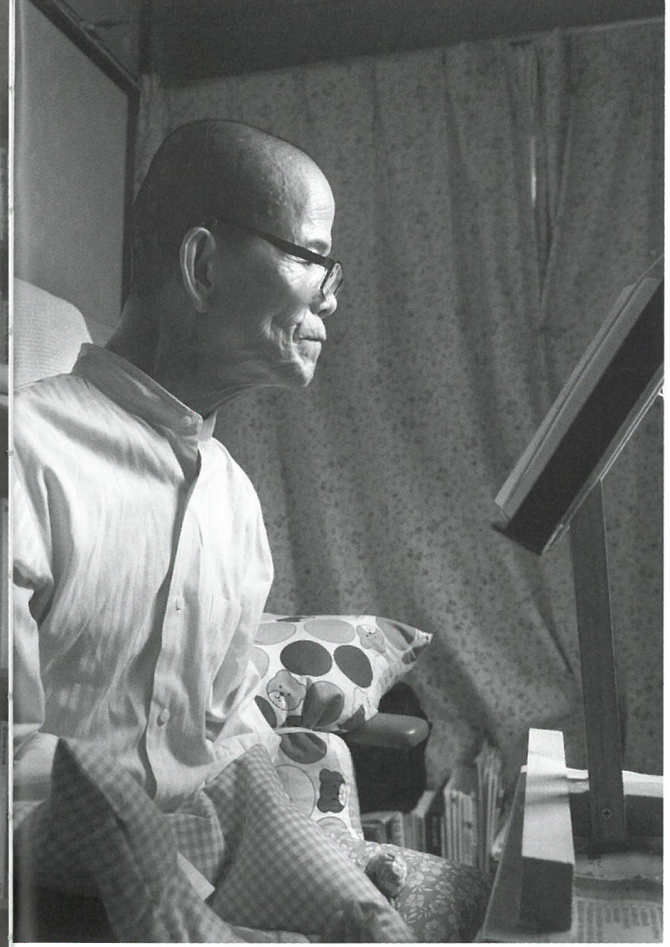




生き抜いてきた研究者

写真・文　豆塚 猛

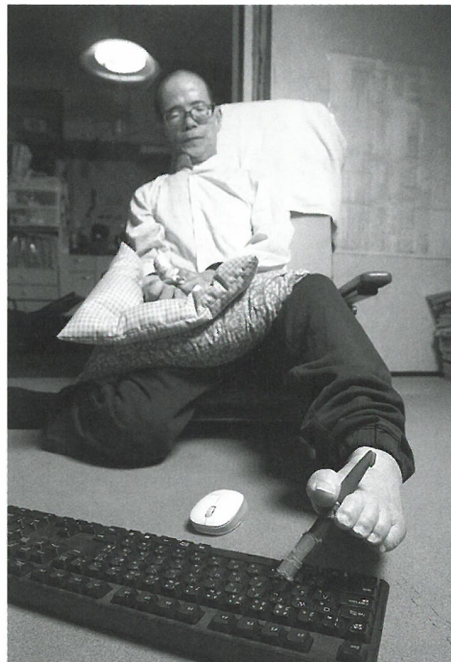
哀きらく

河野勝行氏、74歳。妊娠中の母親が戦時下の食糧難の中、慣れない開墾の重労働に従事、ひと月早く1800余グラムの低体重で生まれ、以来脳性マヒによる重度障害並びに言語障害がある。日常生活全般にわたって介護が必要だ。ヘルパーさんやボランティアさん（以下、ヘルパーさん）による介護が無ければ１日も命がつなげない。

現在の彼の状態は寝返りも出来ず、起き上がるのはヘルパーさんの手を借りて座位の確保、その座位も長時間は苦痛になる。自家製の書見台を使って唇でページをめくっての読書、わずかに動かせる左足の親指と人差し指の間にペンを挟んでの一文字ごとのキーボードによる原稿書きが彼の日課である。本年２月に満100歳で亡くなられた古代史家の直木孝次郎先生に個人的に師事した。師事は56年間にわたったという。歴史の中の障害者像を生き生きと描き出した『障害者の中世』『古代天皇制への接近』『肢体不自由教育の出発』など、共著も含め30冊近くを書き上げた。現在『障害者はどう生きてきたか』（文理閣刊予定）の編集中である。常に命の崖っぷちにありながら生き抜いてきた研究者である。

彼の住まいの印象は本、本、本に囲まれての生活、後は冷蔵庫とベッドがあるだけである。全ての部屋に整理された本棚があり、通路や台所まで本があふれている。これまで彼の唇はどれだけの本をめくってきたのであろうかと驚く。90歳で母親が亡くなった後、19年間ヘルパーさんの力を借りながら、研究者としての自分の暮らしスタイルを貫いてきた河野さんの精神力。

74歳という年齢か、これまでの読書、原稿書きによる無理からくる頸椎症の進行によるものか、体調の悪化が顕著になってきているという。



私の人物ポートレイトはその人にラブレターを書くように撮影してきているが、今回は楽天的な笑顔に胸が射抜かれてしまった。さっそく帰ってきてから、彼の原点とも言える45年前の著作『日本の障害者―過去・現在および未来―』（ミネルヴァ書房）を注文しようとしたが絶版。残念である。彼はもっと世に知られてよい希有な人材である。それが私には哀しい。